垂水史談会報

第 60 号
2024（令和 6）年
11 月発行

【報告】

垂水史談会が
令和６年度　鹿児島県文化財功労者表彰

１１月８日、令和６年度の鹿児島県文化財功労者の団体として、我が垂水史談会が表彰されました。「文化財の保存及び活用に尽力し、地域文化の振興に顕著な功績」が認められたものです。

鹿児島県文化財功労者表彰は、令和元年に町田洋一元会長が個人表彰されましたが、本年は垂水史談会の復活３０年の節目にも当たっていることもあり、記念すべき出来事となりました。史談会会員全員で喜び合いたいと思います。

表彰当日は町田猛会長が出席して、県庁１６階の教育委員会室において表彰状を受けました。

垂水史談会は今後も生き生きとした活動を展開し、文化財の保存・活用につとめながら垂水の地域文化を発掘、発信していきたいと思います。

（瀬角龍平）

【町田会長と和子夫人】

協和小学校　５，６年生
「学校のまわりにある歴史を探そう」

１０月２３日、協和小学校の５，６年生１４人と「学校のまわりにある歴史を探そう」と、歩いて学校周辺を巡りました。生徒たちは校門を出発して旧和光保育園跡にある「公卿石（くげいし）」のところで近衛信輔が海潟に１０日滞在したこと、江之島が昔は弁天島と言われていたことなどを学びました。また菅原神社の境内にある２つの市の指定文化財「ナギの木」、そして江戸時代の桜島大噴火の「桜島焼亡搭」の物語の説明を受け、そして社務所で保管している「海潟（カイガタ）」の名前の起こりと言われる「貝の化石」を手に取って学びました。

また海潟郵便局の国道向かいにある路地の石垣には太平洋戦争当時、アメリカの戦闘機の機銃による跡が今でも残っています。さらに、迫田、脇登地区には海潟造船所のあったことや、当時、藁ぶき屋根が多かったので、機銃を受けた屋根から発火して、海潟の家がたくさん焼けたことなども生徒たちへ説明をしました。

小学校の東側にはむかし、大隅線の鉄道が走っていましたが今はもう廃止されています。昭和４７（１９７２）年２月２２日、この大隅線のトンネルを掘る工事をしていた時に落盤事故で６名の人たちが亡くなった記念碑を見学したあと、貝の化石が出土していた場所へ移動しました。場所はもうコンクリートでふさがれています。すぐそばには大隅線のトンネルが見えています。

今回は秋に見られるセイタカアワダチソウやイタドリの花、そして葉っぱをもむと臭いクサギなどの植物の名前も覚えながら歩いて、運動場の東側の階段を下りてから学校に帰り着きました。約一時間半の歴史探検でした。

（瀬角龍平）

垂水家家老・川上忠實の墓域周りを整備

１０月２７日、垂水高等学校の生徒たちが史蹟巡り学習で訪れるのを前に、垂水島津家の家老「川上忠實（号は周賢）」が埋葬されている「福壽寺跡」で、周辺の草払いや階段の足場作りを行いました。

当日は、墓域への通路の草が生い茂っていたり、落葉や枯れ木が散乱していたため、瀬角龍平、瀬角昌、堀内健三、高櫻健一、新原清実の５名が整備作業を行いました。

「川上忠實」は垂水家第４代島津久信の家老として、島津本家からも一目置かれた名家老でした。後の邑校・文行館教授、乾徽猷が文章をかいた「垂水宰川上周賢子墓碑」には、大体次のようなことが刻まれています。

『川上家の先祖は島津頼久で、後世「川上」を氏とする。川上忠實は、文禄・慶長の役（朝鮮出兵）の時に、垂水島津家２代目当主以久と、３代彰久と共に渡海。明軍と戦う中、新しい拠点へ兵を移す際に、最後尾（しんがり）を務め、明軍の追撃を受ける中「身に三十余創を被り、箭（や）の冑に集まること林の如」き傷を負う。

島津本家の島津義弘、忠恒は忠實に仙丹、成薬を賜う。

帰国後、忠仍（後の４代久信）は忠實に５００石を与え、本家の島津義久は茶の席に召し出し、馬を与えた。その後も、幾多の戦果を挙げる。

元和９（１６２３）年、４代久信は、正室の子忠弘を廃嫡して、側室の子を跡取りにしようとするが川上忠實は、正室の子を跡取りにと進言。久信は逆上し、忠實を城中に召し出し、手ずから忠實を斬る。この件により、忠實と忠實の子・忠利、町田忠照が誅殺され、忠實らの遺骸は、福壽寺に葬られた。』

なお、川上・町田両家は知行を召し上げられましたが、のちに川上家４００石、町田家３００石を下賜されました。また、令和５（２０２３）年１０月２９日には、『川上忠實（号：周賢）没後４００年祭』が子孫らによって催されています。約１時間ほどで整備は終了しましたが、垂水高校生が気持ちよく史蹟巡りをしてくれたらと思います。

（新原清実）

宮之城視察研修　①

中谷潤心

１１月８日（金）、さつま町宮之城にうかがう機会があり、せっかくなので史談会メンバーにもお声掛けし、瀬角龍平・山田義之両氏とともに当地の史跡やスポットを見て回った。

さつま町は２００５年に宮之城町と鶴田町、薩摩町とが合併して誕生した。その中でも宮之城は古より北薩の中心都市で、お店や交通量も多く、文化が豊かで、清流と竹林の山深いところでありながら個人的には賑やかな印象を受けた。

さて我々はまず「宮之城歴史資料センター」を訪ね、こちらの職員の松尾英行氏に宮之城の古代から近代までの歴史を丁寧に紹介いただいた。

さつま町一帯はかつて「祁答院」と呼ばれ、古くは大前（おおさき）氏が治めていた。鎌倉時代に千葉氏が川薩地域一帯の郡司に任命されるが失脚。その後は渋谷光重が領地を拝領する。光重は５人の息子に領地を分け与え、これが「渋谷五族」と呼ばれるようになった。

渋谷五族はそれぞれ祁答院を支配した一族は祁答院氏を名乗り、鶴田を支配した一族は鶴田氏を名乗った。のちに鶴田氏は他の渋谷一族と対立し、応永８（１４０１）年の鶴田合戦に敗れて没落。やがて祁答院氏も戦国時代に島津家に敗れて領地を奪われ、宮之城島津家の時代となっていく。

ほかに西南戦争にまつわる展示物や郷土の偉人など、館内を一通り説明いただいた後は、４人で歩いてすぐの宗功寺公園に向かった。そこに、垂水島津家墓地もそのひとつである、国指定史跡「鹿児島島津家墓所」構成文化財、「宮之城島津家墓所」がある。

この墓地は、江戸時代に島津家の中で一門家に次ぐ家格である一所持として薩摩藩の家老職などを務め宮之城郷を治めた宮之城島津家の墓所である。

ちなみに一門家は、大隅に３つ、重富島津家（重富領１万４千石）・加治木島津家（加治木領２万石）・垂水島津家（垂水領１万７千石）、薩摩に１つ、今和泉島津家（今和泉領１万１千石）の計４家。一所持の家は、宮之城島津家のほか、大隅では、花岡島津家（花岡領）・敷根島津家（市成領）・新城島津家（新城領）・種子島家（種子島領）。薩摩では、肝付家（喜入領）・喜入家（鹿籠領）・佐多家（知覧領）・永吉島津家（永吉領）・小松家（禰寝氏/吉利領）・日置島津家（日置領）・平佐北郷家（平佐領）・入来院家（入来領）・佐志島津家（佐志領）・豊州島津家（黒木領）・樺山家（薩牟田領）。

日向では北郷家（都城島津家/都城領）の計１７家が有力であるが、ほか含めて３０家あったという。この中でも花岡・宮之城・日置・都城の４家が特に重んじられ、一門家とあわせて「八家」といった。

宮之城島津家は、島津本家島津貴久の弟尚久を初代とし、尚久の嫡男忠長（ただたけ/２代目）から現代まで続く家柄である。この墓所には当主とその家族、家臣団の墓碑と祖先世功碑（そせんせいこうひ）がある。墓碑の内訳は、宮之城島津家一族の墓碑が３４基で、当主墓１３基・当主夫人墓１１基・当主子女墓９基・１５代当主以降の累代墓である宮之城島津家之墓１基。その他に忠長に殉死した家臣の墓などが　５基ある。

墓地の中心付近にあり、亀のような造形が目を引く「祖先世功碑」は五代久竹（胤）が建てたもので、碑文には島津家の由緒から宮之城島津家の歴代当主の功績が四代久通まで記されている。

余談だが、この亀のような石造物は亀趺（きふ）と言う。亀趺は石碑の台になっているものを指し、この生き物自体は「贔屭（ひき）」という。贔屭は龍が生んだ９頭の神獣「竜生九子」の一角で、重きを負うことを好むというのだが、「依怙贔屭」という四字熟語の方が有名か。

―以下次号―